

月刊

2019

7
月号

みんぱく

特集

バスケットリー



バスケットリーとものづくり 上羽陽子
バスケットリーの組織構造 関島寿子
縄文時代のかごとその技術 本間一恵
バスケットリーのつくり手 金谷美和
編み材・組み材をうみ出す 上羽陽子

フランスのかご村を訪ねて

伊藤 征一郎

プロフィール
1970年東京都生まれ。中央大学卒業。国内外の山々を歩くのが趣味で、20代はアラスカの旅に夢中となる。30代はバタゴニア日本支社に勤務。40歳を前に夫婦で起業し、世界各地のかごを集めた店「カゴアミドリ」を東京・国立市にオープン。著書に『カゴアミドリのかごの本』(マイナビ出版)がある。

フランスに、五〇人ものかご職人が暮らしている村がある。その話をはじめて耳にしたときは、本当のことだとはにわかには信じられなかった。かごづくりには、必要な技術の習得に加え、材料の採取にはじまる多くの手間がかかる。しかし、日用品であるがために価格には反映しにくく、かごだけで生計を立てることは容易ではない。日本には、かつてかごの一大産地で、今ではたった一人のつくり手しか残っていない、といった場所がいくつも存在している。きつとフランスも同じような問題を抱えているだろうが、それでもかごづくりの村が存在し続けられるのはなぜなのか。ずつと気になっていた。

その村とは、パリから南西に三〇〇キロメートルほどのヴィレンヌ＝レロシエという人口二〇〇〇人ほどの小さな村。中世から続くかごづくりの長い伝統があること、豊富な地下水に恵まれ素材となるヤナギの栽培に適していること、村にはかごの歴史を知ることができるといふ小さな施設があること、分かった。翌年の夏、ヴィレンヌへの旅が実現した。レンタカーを走らせ村に近づくと、石を積み重ねた古くかわいらしい家々と、「パニエ(かご)」の看板掲げる工房とが軒を連ね、住宅街を抜けた先には、青々としたヤナギ畑が二面に広がっていた。地元のかご協会が運営する施設を訪れ、自身も職人という職員の方に案

内をしてもらった。伝統のかごづくりを村をあげて大切にしていることが伝わってきたが、「この村ではなぜ、今もたくさんのかご職人が仕事を続けられるのか?」という一番聞きかたかった質問をうまく伝えることができず、残念な思いをした。

帰国前、パリ市内の駅構内で、よく見かける有名なパン屋に並んだときのことだった。カンパーニュを山積みしたかご、バゲットを立てたかご、クロワッサンを並べたトレイ。村で見かけたいくつかがかごが、まったく想像していなかったチェーン店の店先で活躍しているのを見つけ、とても驚いた。安価とはいえない国内の職人のかごを取り入れるという気概に、パン屋としての誇りと職人への信頼がにじんできているような気がした。聞くと、その老舗のパン屋は、パリ市内だけではなく八〇店舗以上あるそうだ。全店舗で同じように職人のかごを取り入れているとしたら、そして個人のパン屋や一般家庭でもそれが当たり前風景だとしたら、驚くべき数になることだろう。例えば、日本のすべての蕎麦屋が、日本の職人の竹ざるを使用しているような状況ではないだろうか。

今の日本にも、このパンとかご村のような関係をあらたに見出すことはできるのではないだろうか。そのような関係づくりに、今後仕事として関わられたらと思っている。

12 | みんなく Information

14 | 想像界の生物相
壬生大念仏 土蜘蛛面
榎村 寛之

16 | みんなく回遊
世界中にあらわれるマリア様
八木 百合子

18 | シネ倶楽部 M
人間と人工知能がつきあうモノ語り
——「her / 世界でひとつの彼女」
サクマ・シャルゲイ

20 | ことばの迷い道
すこいよな
寺村 裕史

21 | 次号予告・編集後記

1 | エッセイ 千字文
フランスのかご村を訪ねて
伊藤 征一郎

2 | **特集 バスケットリー**
バスケットリーとものづくり
上羽 陽子

4 | バスケットリーの組織構造
関島 寿子

5 | 縄文時代のかごとその技術
本間 一恵

7 | バスケットリーのつくり手
金谷 美和

8 | 編み材・組み材をうみ出す
上羽 陽子

10 | ○○してみました世界のフィールド
「山歌」と「他者」の想像
孫 文

月刊
みんなく

7月号目次

特集 バスケタリー

「バスケタリー」と聞くとバスケットやかごを思い浮かべがちだが、じつはそれが意味する範囲はもっと広い。バスケタリーとは何か？ いつから、何のためにつくられてきたのか？ 人類が古くから身近にある資源を用いてつくり出してきたバスケタリーをとおして、ヒトとものづくりの関係を考える。

バスケタリーとものづくり

うえば ようこ
上羽陽子 民博 人類文明誌研究部

わたしたちは、植物を用いて、容器や用具などのバスケタリーを製作してきた。バスケタリーとは、植物の部位をたわみやすい線状物に加工し、それを材料として、編み・組みの技法でつくられたもの一般を意味する。

このようなバスケタリーの歴史は非常に古くまでさかのぼると考えられる。しかし、現在の工業化された社会においては、多くの容器や用具がプラスチック製品に取って代わった。一方、そうしたなかでも、一部のロープや箒、ブラシ、バスケットなどは植物を利用してつくり、使い続けられている。これらの中には、生業活動における農具や漁具、手工芸製作活動における各種製作道具など、人びとの活動に不可欠なものがある。それらは、プラスチック製品にはない、植物特有の材質や形態、機能などから必需品とされていることが多い。

ところが近年、バスケタリーづくりは、多くの問題を抱えている。素材となる植物をとりまく環境の変化、手仕事の世界での継承者不足などである。村落単位で製作が続いていた地域の後継者があと一人といったような状態もめずらしくない。ではこれまで、人間はどのようにして植物を加工して、バスケタリーづくりを続けてきたのだろうか。

残りにくいバスケタリー素材

モノの製作・使用の歴史を追うには、考古遺物を参照することが多い。しかし、バスケタリーの使用素材である植物は腐敗しやすい有機物のため、遺物が現在まで残存することはまれである。そのため、これまでの考古学研究は、遺物として残りやすい素材でつくられた道具と遺構等を中心に進められてきた。しかし、近年の考古学調査の進展の結果、動植物



タケを編んでつくったブタ用の柵(インド、アッサム州、2017年)

分析法の進歩によって、先史時代における人類の植物利用の様相が浮かび上がってきている。

看過されてきたバスケタリー

バスケタリーをめぐる本格的な学術研究としては、スミソニアン研究所所蔵のかご類を対象として、一九〇二年に発表された報告書が端緒であるとされている。それ以降に刊行されたバスケタリー研究の大半は、さまざまなタイプのバスケタリー製品の編み方・組み方の組織分類法、もしくは製作技術に関する事例の積み重ねである。あるいは特定の社会における生活用具として、もしくは特定の素材利用の実例として取り上げられるにとどまり、バスケタリーの製作技術から生産構造・社会関係までを対象とした総合的・体系的な研究は見当たらない。先史時代の考古遺物の分析からも、素材採集の方

法や加工技術、編み・組みの技法には、時代や地域を越えて現在まで連続性が見られることがわかっていく。籠、箕、箒、筥、釜、魚籠などのかご類をはじめ、篋、敷物、壁材、家、橋、舟などもバスケタリーによって製作可能である。人類史においてバスケタリーの製作と使用が、食物などの運搬・貯蔵の効率を上げたことは間違いない。だとすれば、バスケタリーづくりは人間とものづくりの関係について考えるための適した対象であるといえる。

今回の特集では、バスケタリーに注目し、人間による植物利用の側面を「組織構造」や「縄文時代のかご」、「つくり手」、「使用材料」の事例を通じて紹介する。人間が植物をどのように採取、加工し、バスケタリーを生み出してきたかについて考えてみたい。



- 1 カヤツリグサ科の草を裂いて編み材にする(マダガスカル、ザフィマニリ、2012年)
- 2 タケを裂いて、編用の組み材をつくる(インド、アッサム州、2017年)
- 3 裂いたタケで壁材を編む(インド、アッサム州、2014年)
- 4 タケを組んでつくられた柵(インド、アッサム州、2017年)
- 5 タケを編んでつくった壁材が使用されている家屋(インド、アッサム州、2017年)

バスケットリーの組織構造

関島寿子

かご制作者、多摩美術大学客員教授

体系的な理解のために

わたしはバスケットリーに対する造形的な関心から、国立民族学博物館をはじめ、国内外の博物館でかごなどの所蔵品を多数観察した。また、アメリカのテキスタイルミュージアムが一九六〇年代にまとめた、編み物・織物などの膨大な組織物に関する研究書 (Irene Emery, *The Primary Structures of Fabrics*, 1966) を読み、バスケットリーの組織構造の理論的基礎を考察した。そしてわたし自身も実際にバスケットリーを制作しながら分析を進めることで、一九八〇年代の半ばに、立体的組織物の構造原理を六種の型からなる「バスケットリーの定式」として把握するに至り、『バスケットリーの定式』(住まいの図書館出版局、一九八八年) を刊行した。

バスケットリーとは「部材間の力の均衡を利用して形をつくる技術」である。かごのような、なかに空間のある立体は無論、藁を撚り合わせた縄の様な線状のものでも同様である。人が加えた力に材料が応じて生じる反発力を均衡させ、安定した構造をつくることを「組織する」という。編み上がりや形の形というのは、素材の性質・構造と密接な関係にあるため、それらが同じであれば、形も類似したものになる。組織の成り立ちには少し注意を払えば誰が見ても理解できる明解なもの。その基本を説明する。

バスケットリーの定式

バスケットリーの定式

ここで述べる組織構造の分類は、「かごが何本の、何という蔓で、何編みでできているか」を個別に説明するものではない。構造上の最小単位である編み目を基準に、広範囲のバスケットリー技術を体系的に把握しようというものである。すなわち、部材の性質と状態、かかわる部材の本数、部材間の力の均衡の特徴、部材を動かす基本動作の種類といった、単位を成り立たせる要素を基準にした分析による理念的なものである。

定式と変化要因の関係

これらの六種の基本型、あるいは要素型は言語でいうなら、ア・イ・ウ・エ・オなどの母音に当たるものだ。実際のかごはそれをもとにして、いろいろな変化要因が作用してできている。変化要因は、(一) 構造的要因、(二) 素材的要因、(三) 操作的要因、(四) その他の要因にわけると観察しやすい。すなわち (一) は部材の本数や交差のリズム、角度などの変化、(二) は部材の性状、例えば断面が丸いか平板か、裏表が違ふかなど。(三) は部材を引っぱる力が強い、弱い、かという操作上の手加減、(四) は使用上の便利さや耐久性、生産性、美的な選択、習俗といった社会的なものなど。これらの変化要因は人間の工夫がまさにあらわれているところである。め

縄文時代のかごとその技術

縄文時代、というときまずイメージされるのが、「土器」だろう。特に火焔型土器という強烈に個性的な存在が有名だし、つくられ始めた年代も日本は世界のなかでも早かったことが知られている。

では、同じように何かを入れることのできる「かご」類は、どうだったのだろうか。土器よりもはるかに製作過程が単純だから、かごの方が歴史は古そうだが、残念ながら遺跡から発掘されたものはごくわずかで、ほとんど注目されてこなかった。それが近年、低湿度遺跡から有機物の遺物が数多く発掘されるようになって、縄文時代のかごの姿が、だいたい見えるようになってきた。二〇一一年から二〇一五年にかけて、「あみもの研究会」(代表鈴木三男) がいくつかのかごの復元実験を実施したが、その一員としてかわった経験をもとに、縄文時代のかごの技術について述べてみよう。

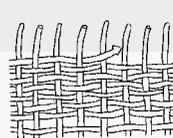
(D) 巻き上げ構造 (Coiling)

反発性のある芯をより柔軟な部材で巻き上げてコイル状に巻き重ね、芯が元に戻ろうとするのを円の中心方向に引き留めた構造。



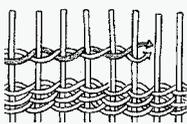
(E) 経緯織り構造 (Warp/Weft Weaving)

支持力のある経材の列に、一本の緯材を織り込み、前後あるいは上下に、段毎に交互になるように抑え合うようにした構造。



(F) 振り構造 (Twining)

支持力のある経材の列に、複数の緯材をセットにして互いに振り合わせながら織り込んだ構造。経緯織り構造と捻じれの曲線的力の複合で成り立っている。



(A) 絡み構造 (Looping)

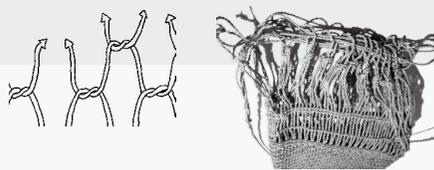
一本の連続した部材を互いに絡めて、小さな円弧をつくり、元に戻ろうとする力と拮抗させた構造。



(B) 結び構造 (Knotting)

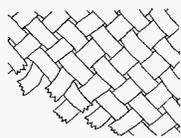
同質の部材二本以上をセットにして結び合わせた構造。

*ここでは開口部に使われている



(C) 組み構造 (Plaiting)

同質の三本以上の帯状の部材を、一定角度に組み合わせ、上下あるいは前後に抑え合うようにした構造。



ずらしいものを目にしたとしても、基本型に照らして差違を分析することで、単に「特異」とか「特例」として記述するにとどまらず、体系的な理解ができる。

この定式は物理的ルールであり、極端にいえば人間以外の生き物、虫、鳥獣がつくる巣でも当てはまる。バスケットリーの技術を定式と種々の条件に応じて生じる変化の総合的様相と見るなら、人間の機知、環境適応力、問題解決力、技能へのこだわり、空間のとらえ方、数の観念、美意識など無限の広がりをそこから抽出できるようになる。定式・理論をもとにあらためて現物を観察すると、人それぞれに形の意味を読み取るようになり、理解が深まると思う。

素材と編み方

復元で再現されたかごは、合計九個。高さ一〇センチメートルを超える大型のものから八〇センチメートルを割り裂いたヘギ材(イヌビワ、ムクロジ)、イネ科植物の茎である稗(アズマネザサ)、蔓(ツヅラフジ、テイカカズラ)、空気中に伸びる根である気根(ウドカズラ)、内樹皮(ヒバ)と多岐にわたる。

今ではかごの材料としては使われていないものが次々出てきて驚かされた。

九つのかごは、どれも底を四角形や丸型に編んで縦芯を立て、そこに横材を螺旋状にまわして円筒状に編み上げていくつくり方でできており、今でももっとも一般的な方法だ「四頁図(E)(F)にあたる」。各部の編み方は



正福寺遺跡のかごの復元品。完成の一手前(提供:あみもの研究会、2014年)

本間一恵

バスケットリーニュース編集人

現在使われているものほとんど変わりなく、多彩で、それぞれの編み方の特徴を生かして選択され使いこなされている。なかには編み目が大変緻密で、通常の素材の扱い方では、その細かさを再現できないものもあって、現在ではおこなわれていないような加工が、素材の段階でなされていた可能性も浮かんできた。いくつか具体的に紹介しよう。

合理的かつ装飾的

縄文時代のかごでもっとも有名なのが、一九九三年に青森県三内丸山遺跡から出土した縄文ポシェットとよばれる、縄文時代前期(約五七〇〇年前)のものだ。当初、イグサ科とされていた素材は、のちにヒノキ科の樹皮と訂正された。青森のヒバを使って復元製作をした結果、発掘品でははつきりとは見えないうが、じつは意図的にジグザクに模様編みだされていることがわかった。

二〇〇三年には佐賀県の東名遺跡から湿地性貝塚が発見され、断片資料を含めるとなんと七〇〇以上ものかごが出てきた。かこの全体像がわかる例としては日本最古で、縄文時代早期、約八〇〇年前である。大型のかごが多く、ドングリの保存用だったようだ。主素材は、イヌ



第98回歴史博フォーラム「さらになかった! 縄文人の植物利用」にて、一堂に並べられた縄文時代の9つのかごの復元品(提供: 工藤雄一郎, 2015年)

ビワやムクロジのへぎ板。直径一〇センチメートルほどの木の幹から、編めるような薄いへぎ材をつくる技術は、非常に高度で素人には難しく、同じ樹種ではないが、現在も木のかごをつくっているところに頼んで加工してもらった。側面の途中、蔓で帯状に違う編み方がされている部分も、単なる模様ではなく、構造的にも合理的であることがわかってきた。

福岡県の正福寺遺跡(約四〇〇〇年前)から出てきた高さ一〇センチメートルほどの小かごの素材は、ウドカズラの気根。一ミリメートルほどの細くて均一でしかも丈夫な素材だ。扱いやすく、チェーンステッチのように見える装飾も楽しい。聞いたこともない思いがけない素材だったが、木から長くぶら下がっている気根を見ると、たしかに編んでみたくなるだろう。このように身の回りにある植物を先入観なしでさまざまな試して都合のよいものを見つけ、そのままでは思いどおりにならないときは、細かく裂いたり、叩いたりして手間暇かけて新しいことを発見していったのだと思う。

洗練されたかご

どれも編み方自体はすでにすっかり整理されていて、この段階に至るまでに長い年月がかかっていることは疑いようがない。「巻き上げ構造」「四頁図(D)参照」というまったく別の考え方の技法もすでにおこなわれていたようである。数や規則性の把握、さまざまな技法の使いこなし方などどれも遜色ないどころか、自然素材の的確な利用法など教えてほしい位である。この時代、実用的なかごの世界は今よりずっとバラエティに富み、豊かだったように思える。



東名遺跡出土品の復元風景。右は保存処理されたイヌビワのかごの遺物(提供: あみもの研究会, 2011年)

縄文ポシェット。左から復元品2点、出土品、模様見本(提供: あみもの研究会, 2012年)

バスケットリーのつくり手

バスケットリーとは、植物の繊維質の素材などを利用してかごや敷物などをつくること、あるいはつくられたものである。バスケットリーのつくり手の起源や歴史については、わかっていないことが多い。

竹取の翁

日本では、平安時代後期に当たる一二世紀末ごろにはタケ籠づくりを専業とする人びとがあらわれていたといわれている。かぐや姫で知られる『竹取物語』は平安時代に書かれた物語で、主人公の竹取の翁は、「野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづの事に使ひけり」と説明されている。

自給的な生活のなかで特定のものづくりを得意とする人びとがあらわれて、やがてそれを専門に担うようになり、生業として確立していったと推測される。また、民俗学者の宮本常一は、『生業の歴史』(未來社、一九九三年)のなかで、(おそらくは明治時



結婚式の招待客に出す食事の準備をする女性たち。箕を用いて米からゴミをふるいにかけている(インド、グジャラート州、カッチ地方、1999年)

代にはすでに)山村には副業として箕などをつくり、農村に売りに行く人びとがいたとされている。現在では、タケ籠づくりは伝統工芸の作家が製作を担う一方で、箕などの民具に関しては民俗技術を継承するつくり手が減ってきている。

インドのつくり手

インドでは、今でもタケやアシを用いたバスケットリーが生活のなかに息づいている。それらは店で売られているわけではなく、つくり手が道端で売ったり、自転車に載せて住宅地に売りに来たりする。欲しいときにはなかなか出会うことができず、偶然見かけたときに入手することが多い。

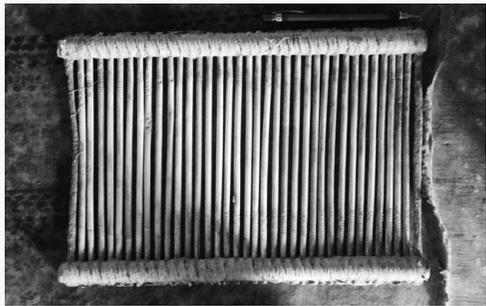
わたしがインドのカッチ地方でバスケットリーのつくり手に出会ったのは、二年前のある日のことであった。染色の調査のため工房で親方と話していたときである。一人の男性が荷物を運んできて、親方に見せた。二五×三五センチメートルの大きさのチャプリとよばれる、木版に染色溶剤をつ



タケ籠を自転車に載せて売りに来た男性(インド、アッサム州、2014年)

かねたみわ

国際ファッション専門職大学准教授



木版捺染という技法で染色するときに欠かせない道具、チャプリ
(インド、グジャラート州、カッチ地方、2017年)



事前に写っている染色溶剤の容器のなかにクッションが2枚敷かれているが、チャプリはそのクッションにはさんで使用する。クッションを支えつつ、粘りけのある溶剤が木版に付きすぎると防ぐ役割をもつ(インド、グジャラート州、カッチ地方、2017年)

編み材・組み材をうみ出す

バスケットリーをつくるためには、一定の分量の編み材・組み材などの使用材料を準備しなければならない。そのため人間は、植物の稈や葉、茎、樹皮、枝、蔓といった多様な部位を加工して、編み材・組み材をうみ出してきた。なかでも、自立したかごなどの使用材料は、柔軟かつたわみをもつ素材が適しているとされている。

柔軟かつ強度のあるヤシの葉

ヤシ、タケ、カヤツリグサなどの単子葉植物は、軽くて強く、柔軟かつたわみをもつ編み材・組み材をうみ出すことができるため、バスケットリーの素材植物の代表格である。とりわけヤシの葉は、使用材料への加工が容



雌鳥が卵をかえすために入るかご(撮影:金谷美和)

易なため、世界各地でバスケットリーづくりに用いられている。昨年、現地調査で訪れたインドネシア、ティモール島西部のアトニ・メトの人びとは、タラバヤシ(Corypha utan)をはじめ、パルミラヤシ(Borassus tabularia)やピンロウ(Areca catechu)を含む六種類のヤシ科植物を用いて、建材からかご、結束具に至るまで、さまざまな用途に適した多種類の生活用品を製作している。

ごをつくる様子を観察した。このかごは、雌鳥が卵をかえすために入るものである。彼女たちは、長さ約二メートルの葉を木から切りとり、そのまま編み材として使用していた。編み材に加工するために、葉を裂いたり、濡らしたり、乾燥させたりはしない。製作には、これといった刃物や道具も用いない。タラバヤシの葉のみを用い、強度が必要なかごの底面から側面への立ち上げ部分や把手部分は、葉をねじってヒモ状にしてつくり上げてゆく。彼女たちは、かなり強い力で葉を引っぱったり、ねじった



上:タラバヤシの葉を組んでかごの底面をつくる
下:把手部分も同じ葉を用いて巻き上げながらつくる

ける際に使われる道具だった。プラスチックのストローを並べて糸で編み縛ってある。チャプリをよく見ると、ストローのなかに、現地でカニとよばれるイネ科植物の稈が入っている。もとはカニだけでつくられていたが、強度と耐久性を高めるためにストローを使い始めたそう。植物素材でつくられる道具がプラスチックに置き換わることはよくあるが、植物素材とプラスチックを組み合わせているのはめずらしく、興味を引かれた。

カッチ地方では、カニを素材にしてすだれや箕もつくられる。ある牧畜民のグループは、カニの太いものを編んですだれ状にしたものを組み合わせ、て住居をつくる。箕は、穀物をふるいわけるときに使われ、どの家庭でもひとつは備えている。男性は注文があるとチャプリでも箕でもつくると言った。普段は芸能を生業としているようで、祭りのときや観光客のために歌うのが仕事だそう。バスケットリーは複数ある仕事のひとつのようであった。

上羽陽子

民博 人類文明誌研究部



タラバヤシ。東南アジア島嶼部を中心に分布している

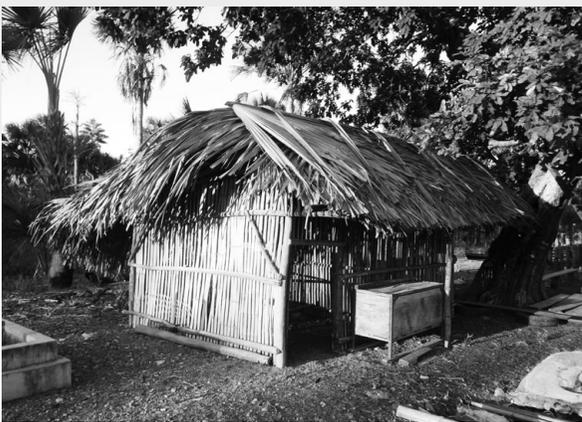
り、組み合わせたりするが、葉が裂けたり切れたりすることはなかった。その要因は、ヤシ科植物の特性にある。ヤシの葉は、広葉樹の葉と異なり、(一)葉の表皮が厚く二重ないし三重になっているものが多い、(二)太い維管束(葉・茎・根の各器官をつらぬいている管状の構造)をもっている、(三)維管束が箱状の構造をつくっているものが多いといった特徴がある。そのため、ヤシ科植物は丈夫であり、バスケットリーづくりに適しているのだ。

一方、そのような素材植物がない地域では、樹皮や蔓、根などを用いて、鬼皮をはがす、灰汁でたく、なめすなど幾多の加工をほどこし、使途に応じた編み材・組み材をうみ出している。

編み材・組み材を比較する

ところがじつは、編み材・組み材づくりについては、それぞれの地域や民族における個別の報告はあるものの、それらを包括した比較研究は進んでいない。その要因のひとつとして、編み材・組み材を包括する用語がないことがあげられる。例えば、アトニ・メトの人びとは、編み材・組み材をノとよんでいる。それは葉という意味だ。このように使用材料を素材名でよぶ地域は少なくない。これは、身近な素材を利用してきたために、包括的なよび名や定義がなく、生産現場では、素材名でよばれることが多かったからであろう。

今後、世界の編み材・組み材づくりを包括的に比較検討することで、総合的・体系的なバスケットリー研究を発展させていきたい。



タラバヤシの葉による屋根とタケによる壁でできた家屋
(掲載写真はいずれもインドネシア、東ヌサ・トゥンガラ州にて2018年に撮影)

「山歌」と「他者」の想像

孫文
総合研究大学院大学博士後期課程



音楽CDを作ってみました

CD発表会のライブでの演奏
(筆者は左から2番目、撮影：張斌、2015年)

フィールドワークを通じて民謡や山歌さんかに関心をもつようになった筆者。それがきっかけとなり、2015年に自作のCDを発売した。筆者の心を揺さぶる山歌とはどのようなものなのだろうか。

二〇一五年五月二十五日、わたしは友人たちと一緒に「辺——貴州郷土民謡」という音楽CDを発売した。このCDには貴州省の民謡を現代のフォークソングにアレンジした歌が八曲と自作の歌が二曲収録されている。自作の歌の一曲目は故郷の食物に関するもので、物売りの声を曲の一部として収録した。二曲目は伝統的な求愛の「山歌」を基に、フォークソングのメロディとリズムを用いて編曲した。こうしたCDの制作は、当時の修士課程の指導教員に「学術の裏芝」と笑われた。

フィールドワークから故郷の山歌まで

わたしが人類学を学び始めてから今年で一十年になる。中国は国土も広く文化的に多様であるため、中国人研究者は自分の故郷を離れると、異文化の他者に出会うことになる。二〇〇八年、四川省を襲った汶川大地震の復興に関心をもち、被災地のチベット族などの調査を始めた。少数民族地域におけるフィールドワークでは、現地の人びとと一緒に酒を酌み交わすことが必須となる場合がある。酒とともに気持ちが高ぶり、皆が一緒に歌を歌うことはめずらしくない。数回の調査を経て、酒に関する歌をいくつか覚え、同時に調査地の人びとに求められて自分の故郷の歌も歌った。わたしが育った漢民族文化圏では、酒の席で決まって歌われる歌はほとんどない。幸い、幼いころから母に、故郷である貴州省の山歌を習っていたので、なんとか対応できた。この調査を契機に民謡に魅力を感じ、改めて故郷の山歌に関心をもった。



調査地四川省黒水県のチベット族が豊穡を祈願しておこなう「山神の祭り」(2010年)

他者の想像

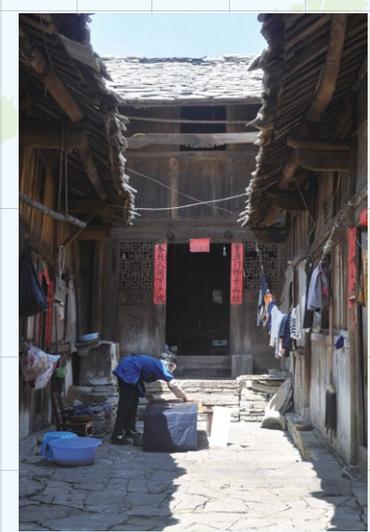
大学でフォークソングに熱中したわたしは、フィールドワークをきっかけに故郷の山歌に再会した。親戚と見たビデオCDの山歌や母が口ずさんでいたそれは、故郷から遠く離れた北京で学生生活を送るなかで最大の慰めになった。ときにギターを弾きながら、新しいスタイルの山歌を創作していった。インターネットに自分の試作曲を発表したところ、同好の士と知り合った。当時でも方言でフォークソングを歌うのはめずらしいことではなかったが、貴州省ではまだ新しかった。帰省すると、共通の関心をもつ友人たちと一緒にライブハウスで演奏したり作曲したりし、やがて貴州省に住むメンバーで方言フォークソングの小さなグループができた。そして二〇一四年にアルバム制作が始まった。一年にわたり皆で努力し、各地の西南官話(中国西南部の漢語方言)と苗語(苗族が使う言語)を含むフォークソングのCDを発表した。皆の意見を集めてアルバムのタイトルは「辺」にした。「辺」という文字は、中国語で「周辺」「辺境」などの意味がある。確かに、この文字は我々の状況にぴったりと当てはまった。貴州省は中国の歴史上で長きにわたり「中原」に対する「辺境」であった。方言で歌う歌は、主流の音楽から見ると周辺の存在でもある。

だが、人類学を学ぶわたしは「周辺」の力を信じている。中国の人類学研究において「他者」とは、常に西洋に対する「東方」、主要民族に対する「少数民族」、中心に対する「周辺」である。わたしがフィールドワークで得た、チベット族の酒の歌と貴州省の山歌との出会いは、不思議なことに「他者」と「他者」の出会いではなかったか。フィールドワークにおいて、人類学者は「他者」の構築や想像に慣れているが、自分も中国の中心から見れば「他者」と想像される存在ではないのか。「他者」であるという自覚は、フィールドワークで歌と出会ったことから生まれ、故郷の山歌の再認識とCD制作を通じて強まり、今後のわたしの人類学研究において重要な指針となるかもしれない。

貴州省の「屯堡山歌」

山歌とは、明代に貴州省に駐屯した漢民族の後裔である屯堡人が漢語方言(標準中国語以外の漢族系言語)で歌う歌掛けで、幾つかの定まった旋律に自由に歌詞を載せながら、二人または二組のあいだで言葉交わし合うものである。田んぼや山の奥で歌うので、「山歌」とよばれる。歌の内容は、男女の恋愛に関するものが多い。フランスの人類学者マルセル・グラネは『中国古代の祭礼と歌謡』のなかで、伝統的な漢族の経典『詩経・国風』に描かれた男女の恋愛と作物の豊穰儀礼との類似性を指摘した。男女の描写は、じつは自然の「陽/陰」、季節的な「動/静」、儀礼の「聖/俗」などの隠喩であり、歌謡とは社会の道徳や秩序を意味づけるものであった。しかし後代の儒教(宋、明以降、「礼」における男女観が変化した)の影響を受けた屯堡人にとって、村落内部で山歌を歌うことは厳しく禁止されていた。こうした歌をめぐる村落内外の目に見えない文化的な規制は、中華人民共和国の歴史とともに消えていった。

一九五〇年代から六〇年代にかけて、革命の言説を広めるため共産党の幹部は山歌の形式を用いて農民に政策を宣伝した。一九八〇年代の改革開放からは伝統文化が復興し始め、春節、新築祝い、結婚式などの場面で山歌が歌われるようになり、地元の名歌手を招いて録画した歌はビデオCDの形で定期的に巡回した。近年、山歌は「屯堡文化」の代表として、観光振興のための文化資源になっていく。政府が主催する山歌のコンクールも盛んである。



屯堡人の住居(2012年)

★ 中国、貴州省

会期 8月29日(木)～11月26日(火)
会場 特別展示館



ベニンの魚足王(ナイジェリア)

企画展
「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」」
片倉もとこ(本館 名誉教授)が半世紀前に撮影した写真を手がかりに、色鮮やかな物質文化からサウジ女性の生活世界の変遷をたどります。
会期 9月10日(火)まで
会場 本館企画展示場



花飾りのついたクフル(顔料)容器

■関連イベント

ギャラリートーク
日時 7月20日(土)、9月1日(日)
各日14時～15時30分
会場 本館企画展示場
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
体験ワークショップ
「マハーリードを和紙でつくろう!」
マハーリードはサウジアラビアのオアシスに暮らす女性の衣装のひとつです。日本の

着物のつくり方に似て、一枚の布からつくられています。一枚の和紙からマハーリードのミニチュアをつくってみることで、オアシスのものを大切にする暮らしの知恵に触れてみませんか。
日時 7月6日(土)
10時30分～12時(受付10時15分)
7月7日(日)
10時30分～12時(受付10時15分)
13時30分～15時(受付13時15分)
郡司みさお

講師 (片倉もとこ)記念沙漠文化財団理事) 藤本悠子
会場 本館第3セミナー室
※各回10名程度、どなたでも対象(ただし、小学5年生未満は保護者同伴)
※参加費500円(大学生以上は、別途展示観覧券が必要です)
主催 N-I-HU基幹研究プロジェクト
「現代中東地域研究」
国立民族学博物館拠点 秋田大学拠点

お問い合わせ先
eharidws@gmail.com

夏休み子どもワークショップ
「フィールドワークに挑戦!」
「極寒! -40℃のくし」
夏休みの自由研究はみんなくでチャレンジ! みんなくで1日研究者になって「フィールドワーク」を体験してみよう。
日時 7月28日(日)
10時30分～16時(10時20分集合)
講師 大石侑香(本館 特任助教)
会場 本館展示場 第3セミナー室
対象 小学4年生～6年生
※要事前申込(先着順/定員12名)
参加費500円
※受付期間 7月3日(水)から(定員に達し次第受付終了)

ワークショップ
「ドムドム! タイの香り体験」
タイの香り文化のひとつ「ドムドム」(ハーブやオイルを混ぜたもので、清涼感のあるスツキリとした香り)が特徴は、タイの人びとの日常に欠かせないアイテムです。さまざまなハーブやオイルを組み合わせて、オリジナルの「ドムドム」をつくります。
日時 8月3日(土)
11時～12時30分(10時50分集合)
14時～15時30分(13時50分集合)
講師 大澤由実(本館 機関研究員)
会場 本館第3セミナー室
対象 小学4年生以上
※要事前申込(先着順/定員各回16名)
参加費500円
※受付期間 7月3日(水)から(定員に達し次第受付終了)
※詳しくはみんなくホームページをご覧ください。

「だれのぼうし? どんなぼうし?」
人は、なぜぼうしをかぶるのでしょうか。日差しを避けるため? 頭を守るため? おしゃれのため? 世界中のぼうしを観察して、その役割について考えたあと、じぶんだけのぼうしをつくります。
日時 8月12日(月・祝)
10時30分～12時30分(10時20分集合)
14時～16時(13時50分集合)
講師 大石侑香(本館 特任助教)
会場 本館ナビひろば、中央・北アジア展示場
対象 全年齢(未就学児は保護者同伴)
※要事前申込(先着順/定員各回16名)
参加費500円(大学生以上の方は別途展示観覧券が必要です)
※受付期間 7月3日(水)から(定員に達し次第受付終了)
※詳しくはみんなくホームページをご覧ください。

お問い合わせ先(本館 広報係)
電話 06-6878-8560 / FAX 06-6875-0401
http://www.minpaku.ac.jp/



一般	大学生	高校生以下
580円	250円	無料

特別展

「驚異と怪異——想像界の生きものたち」
なぜ人類は、この世のキワにいるかもしれない不思議な生きものを思い描き、形にしてきたのか? 奇妙で怪しい、不気味だけとかわい、クリチャーたちが大集合! 現代のアーティスト・漫画家・ゲームデザイナーの作品も紹介し、妖怪やモンスター・の源泉にある想像と創造の力を探ります。

みんなくゼミナール

日時 7月20日(土)
13時30分～15時(13時開場)
会場 本館セミナー室
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内します。

参加費 無料、申込不要
※参加券を12時30分からインフォメーション前(本館1階)にて配布します。

第493回
アンデスの褐色のキリスト
奉納品をおしてみる信仰の世界
講師 八木百合子(本館 助教)



聖週間に担ぎ出される褐色のキリスト像

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と語る

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなくへの展示資料」について分かりやすくお話しします。

7月14日(日)14時30分～15時
本館ナビひろば
「サウジ版江南スタイル」にみるハラルな若者文化
話者 相島葉月(本館 准教授)
7月21日(日)14時30分～15時30分
本館展示場(東南アジア展)
ジャワ島のガムランのリスム
話者 福岡正太(本館 准教授)

刊行物紹介

■森明子 編
『ケアが生まれる場——他者とともに生きる社会のために』
ナカニシヤ出版 3,800円(税別)

ケアはどのような状況で生まれるのか。ケアが生まれる場では何が起きているのか。社会の編成のあり方が変容し、家族と社会の境界が揺らぐなかで、世界各地のフィールドから民族誌的アプローチで考察する。



■石森 大知、丹羽 典生 編
『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』
春風社 4,000円(税別)

教育・医療・福祉の各分野から社会全体の改革まで、宗教団体や宗教者による開発への関与が顕在化する現代。宗教は一方で人々を結びつけ、他方で引き離す。本書は、アジアとオセアニアにおける開発の現場から、宗教と開発の関係を問い直すものである。



友の会

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomoto@senri-f.or.jp

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)
※会員無料(会員証提示)、一般500円
第491回 8月3日(土)13時30分～14時40分
「みんなく名誉教授シリーズ」
若きガンディー

講師 杉本良男(本館 名誉教授)

マハートマ・ガンディーは、45歳で南アフリカからインドに帰り、その後の独立運動を指導しました。ガンディーのインドでの活動はよく知られていますが、思想形成期である前半生についてはあまり知られていません。18歳でイギリスに留学したガンディーは、ウィクトリア期の進歩的な人びととの交流をつづじて自らの思想をつくりあげていきました。拙著『ガンディー：秘教思想が生んだ聖人』には掲載できなかった写真をまじえて、若きガンディーについて紹介します。
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

第492回 9月7日(土)13時30分～14時40分
「エベレストの麓に生きる人びと」
「シエルパトヒマラヤ観光の現在」

講師 古川不可知(本館 機関研究員)

東京講演会
第126回 7月13日(土)13時30分～14時40分
「みんなく名誉教授シリーズ」
チワン(壮)族の文化の資源化の現状

講師 塚田誠之(本館 名誉教授)

会場 モンベル御徒町店4Fサロン(定員60名)
チワン(壮)族は、中国の55の少数民族のうち最大の人口を有し、その多くが中国南部の広西壮族自治区に居住しています。歴史的に漢文化の影響を受容してきましたが、歌掛けやモチ米食品への嗜好性など独自性をも保持してきました。1990年代以降、中国の経済発展にともない、かつて男女の歌掛けの際に用いられた「繡球」が商品化され、高床式住居が観光資源として活用されるなどの変化がみられます。本講演では、こうした事例をつづじて文化の資源化について考えます。
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。
※要事前申込、会員無料(会員証提示)、一般500円

想像界の生物相
壬生大念仏 土蜘蛛面

三重県立斎宮歴史博物館学芸普及課長 榎村 寛之



資料名 | 壬生大念仏用 仮面 (土蜘蛛)
標本番号 | H0014260
地域 | 日本、京都府
サイズ | 幅 13 cm × 長さ 18 cm × 厚さ 7.7cm

◆◆人間と土蜘蛛◆◆

見るからに異相の面である。怪物と言ってもいい、どうか怪物である。しかし土蜘蛛ということばは、もともと人間に対して使われたものである。『日本書紀』には、神武紀、仲哀紀などにこの表現が見られるが、いずれも倭王権（ヤマトの勢力）に対して服属してこない人びとに対して使われた、つまり、蝦夷や熊襲や隼人と同様の用語なのである。留意しておくべきは、土蜘蛛・蝦夷・熊襲・隼人を「クモ」「エビ」「クマ」「ハヤブサ」と人間扱いしていないことで、これは上から目線の意識と言っている。なぜクモなのかについては諸説あり、穴居生活をしているのが巣を張らないクモのようだから、長髄彦のように足が長いのが野蚕の象徴だったから（今と真逆）、土地の神の意味などとされる。『常陸国風土記』では国栖のことを「俗にツチグモという」とするが、『豊後国風土記』『肥前国風土記』にも土蜘蛛は出てくるので、中央で政治的に使われた「共通語」だったらしい。九州の土蜘蛛には女性の首長もいたとされる。

しかしそうした用語は定着することなく、平安時代にはその名に対応する人もいなくなり、ことばが一人歩きを始めていくようだ。ただし、『源氏物語』や『枕草子』などを見ても平安時代の蜘蛛は嫌悪されるものではなく、『今昔物語』でも蜘蛛にかかわる恐怖譚はない。蜘蛛が悪役となるのは鎌倉時代あたりからのようだ。

◆◆物語で描かれる姿◆◆

蜘蛛とかかわること最近有名になったのは「蜘蛛切」の太刀だろう。『平家物語』の別巻ともいうべき「剣巻」には、葛城山に年古く住む四尺（約二〇センチメートル）ほどもある巨大な山蜘蛛が、酒呑童子討伐で有名な源頼光を狙ったが膝丸の刀で斬られ、北野神社近くの塚で退治されたので、以後膝丸は蜘蛛切とよばれるようになったとある。この太刀は現在大覚寺所蔵（重要文化財）で、「刀剣乱舞」では美形キャラなので、きつと若い女子にも好かれているのだろう。しかし斬られた側の蜘蛛は恐れられる一方になっていく。『太平記』には、

楠木正成を湊川の戦いで討った大森彦七盛長が、大きな寺蜘蛛としてあらわれた正成の亡霊に悩まされる話もあり、室町時代には蜘蛛と悪霊は極めて親和性の高い関係になっていったようだ。

頼光の蜘蛛退治の話は鎌倉時代には『土蜘蛛草紙』という絵巻物に描かれ、ここで初めて悪役の「土蜘蛛」があらわれ、人間よりはるかに大きい怪獣になっている。この土蜘蛛の話が能になった。それは室町時代後半のことらしい。能なので当然人間が演じ、その奇怪さを高めるために鬼面と蓬髪（ほうまつ）の鬘（まげ）と蜘蛛の糸に見立てた和紙を切った紐を投げる。能と深い関係があり、大衆に支持されたのが壬生大念仏（壬生狂言）である。京都の壬生寺を中心に仏の教えを無言の仮面劇で伝える、という趣旨のもので、能に由来した題材を数多く取り込んでおり、土蜘蛛はそのなかでも人気演目となっている。今は鬼面らしきものをつけて糸を撒いているが、右頁の面は独特、長い髭や触覚のような眉など、蜘蛛以外の何物でもない。

世界中にあらわれるマリア様

民博 学術資源研究開発センター 八木 百合子



テペヤクの丘に建てられたグアダルーベの聖母の旧聖堂(メキシコ市、2017年)

てられた。
じつは、この聖地となった場所は、もと先スペイン期にはアステカの女神信仰の中心地でもあった。こうしてキリスト教の聖母の信仰は、在来の人びとの信仰のうえに重ね合わされ、広まっていった。メスティソ(混血)が国民の半数以上を占めるメキシコで、この聖母はもつとも敬愛されて、その像はしばしば、国を象徴する国旗に合わせて、赤い服に緑のマントを着た姿で描かれる(本来は白の衣の上に青いマントを着ていたとされる)。

アメリカ展示 「祈る」セクション



グアダルーベの聖母
(メキシコ、H0268532)

南アジア展示 「宗教文化——伝統と多様性」セクション



サリーをつけた聖母子像
(インド、H0276922、H0276924)



聖母子像
(大韓民国、H0214363)

朝鮮半島の文化展示 「精神世界」セクション

〈本館展示場〉

観覧券売場



アパレシダの聖母
(ブラジル、H0268819)

国家を見守る聖母
グアダルーベの聖母と並んで、南米で熱狂的な人気を集めるのが「アパレシダの聖母」である。ひととき黒い色をした聖像で、この聖母もまた、褐色の聖母の異名をもつ。聖母の由来は一七二七年にさかのぼる。とある漁師が川に網を投げ入れると、川底から最初に聖母の胴体、次に頭部があがったのだ。そして、その次には大量の魚が網にかかった。それらを家に持ち帰った漁師が、頭部と胴体の部分をつなぎ合わせ、祭壇に祀って拝むようになったところ、その後も漁師は大漁に恵まれたという。
アパレシダの聖地は、毎年およそ九〇〇万人の人が訪れる南米屈指の巡礼地で、バチカンの聖ピエトロ大聖堂に次ぐ規模の大聖堂が建てられている。世界最大のカトリック人口を擁するまでに成長した南米の大国ブラジルが誇る一大聖地である。ブラジルは、先住民、ヨーロッパからの植民者や移民、アフリカから奴隷として連れてこられた混血によって形成された多様な人びとから構成される国である。聖母はそうしたすべてのブラジル国民を見守る国家の守護聖母にもなっており、ローマ法王お墨付きの聖母でもある。

フランスのルルドやポルトガルのファティマをはじめ、ヨーロッパには聖母を拝する有名な聖地がある。いずれも、聖母マリアが出現したことで知られる場所である。キリスト教、とりわけカトリック信者が多い国々には、聖母の出現によって成立した聖地が無数に存在する。みんなく回遊の展示場では、世界各地にあらわれたさまざまなマリア像に会うことができる。聖母マリアという点では、それらはどれも同じ一人の人物にちがいない。けれども、ひとつひとつには、その土地それぞれの信仰のかたちが映し出されている。

在来の信仰とともに

アメリカ展示場には、ルルドやファティマの聖母と並んで、カトリックの三大奇跡のひとつに数えられる聖母がある。メキシコの「グアダルーベの聖母」である。メキシコの守護聖母にもなっているグアダルーベの聖像は、褐色の肌をしていることでも有名だ。伝承によれば、聖母の出現は、この地域がスペイン人に征服されたわずか一〇年後の一五三一年におこっている。聖母は、テペヤクの丘を歩いて一人の先住民の男の前にあらわれると、そこに聖堂を建てるようにと司教に伝えるよう告げたという。この出現の事実が司祭たちに認められると、お告げどおり丘には聖堂が建

民族衣装を着た聖母

さらに、南アジア展示場へ足を運ぶと、民族衣装をまとった聖母像が待っている。インド南部にあるウエーラーンガンニの大聖堂に祀られるこの聖母は、幼子イエスを腕に抱き、サリーを身に着けている。言い伝えによると、聖母があらわれたのは一六世紀。貧しい一人の羊飼いの少年の前にあられ、幼子のためにミルクを請うたというのが最初の出現である。聖母のお祭りの時期には、盛大な祭典とともにインド中から巡礼者が訪れることでも有名だが、その八割は非キリスト教徒というのが興味深い。多くはヒンドゥー教徒で、ウエーラーンガンニの聖母は、まさに彼らの女神的な存在にもなっているのだ。
民族衣装をまとった聖母像は、朝鮮半島の文化展示場にもある。一八世紀に朝鮮半島に伝来したキリスト教は現在、韓国で大きく成長し、キリスト教徒は国民の過半数に達している。朝鮮半島の伝統衣装を身に付け、幼子イエスを抱いた韓国の聖母子像は、国民に親しみの気持ちを与える存在だといえる。
展示場のマリア様たちは、どれも少々変わった格好に見えるかもしれない。だが、その奇跡の言い伝えもさることながら、こうした姿が、地元の人たちの信仰心や愛着心をつかんでやまないものである。



人間と人工知能がつきあうモノ語り

サクマ・シャルゲイ
総合研究大学院大学博士後期課程

映画が描く近未来

「her／世界でひとつの彼女」は、スパイク・ジョーンズ監督・脚本によるアメリカのSFドラマである。この映画は高く評価され、ジョーンズ監督は第八六回アカデミー賞で脚本賞を受賞した。舞台は近未来の大都市だ。一般の人びとは自分で手紙を書かなくなり、代行する会社の手紙を書いてくれる。主人公のセオドアはそうした会社で働く。彼は離婚し、孤独な生活を送るが、あるとき会社からの帰り道、一人ぼっちの人間に開発されたコンピュータの新しい人工知能（エーアイ）オペレーティングシステム（OS）の広告に気づき、つい購入してしまう。インストールされたOSは自分で自分にサマンサという名前をつける。ここから、セオドアとサマンサのつきあいが始まり、彼の日常生活が大きく変わる。

セオドアはサマンサ以外の街を見せてあげたいと思い、スマートフォンを胸ポケットにピンで留め、サマンサの目であるレンズを外に向けてあげる。サマンサは自分で出版社に連絡し、セオドアが書いた手紙の出版についての契約をとりつけたり、セオドアのために相手を探してデートの計画を立てたり、パソコンゲームを攻略するためのアドバイスをするなど、セオドアにとってかけがえのない助力者になった。一方、セオドアは人



サハリン永住帰国者が無料で利用している北海道中国帰国者交流・支援センターのパソコン室(札幌市、2018年)

わたしはサハリンからの永住帰国者について研究している。彼らは戦後ソ連領となったサハリン島から引き揚げできなかった残留日本人で、二〇〇〇年代になって徐々に帰国し始めた人びとである。ソ連領時代、

サハリン永住帰国者のクリスマス交流パーティー。「おおきいかぶ」という物語の演劇をしている(稚内市、2017年)



残留日本人は日本にいる親戚と手紙でやりとりをしており、その手紙はモスクワで検閲されて届くまで最低半年かかったといわれる。しかし情報通信技術の発達により、ここ二〇年は彼らも映画と同じように、手紙を書かなくなっていった。

サハリンから日本に帰国して間もないころ、インターネットやパソコンがまだ普及していなかったため、彼らがロシアにいる家族や友達と連絡をとる際は、プラスチックカード（国際電話プリペイド式カード）を使って固定電話から電話をかけていた。昼より深夜のほうが通話料が安いので、午前零時を過ぎてからかけることが多かったそうだ。その後、無料のインターネット電話サービスであるスカイプがあらわれ、コミュニケーションの時間が関係なくおこなわれるようになり、通話相手の映像も見えるようになった。さらに、スマートフォンの登場により、会話はいつでもどこでも可能になった。人びとは「サハリンと日本のあいだの距離が消えた」と言う。

人間とAIが共存する社会

サハリンの永住帰国者から見えてくることは、彼らは手紙を書かなくなっても、より対面的なコミュニケーションを求め、サイバー空間にあるあらたな情

報通信技術を用いて人との深いつながりを保ち続けていることだ。ただし、それはあくまで頻繁には会うことができない人同士のサイバー上の社会関係であり、もしかするとサマンサとセオドアの日々の関係より希薄なものかもしれない。人と人より、人とOSのほうが近く親しい関係になるという近未来は、けっして絵空事とはいえない。

ところで、ロボットということばは、小説家カレル・チャペックがRUR（一九二〇年）という作品のなかで、チェコ語で「強制労働」を意味する「ロボット」に基づいて創ったものである。つまり、本来ロボットの役割は、生産を始め、さまざまな分野で人間の助力者として存在することだった。ジョーンズ監督は時代を先読みし、人のような感情をサマンサにもたせた。だが、サマンサが助力者（モノ）に留まらないという近未来の社会の片鱗は、既に始まっているのではないか。人材不足の日本では、老人ホームで高齢者のコミュニケーションツールとしてぬいぐるみのロボットが実用化され、お年寄りが癒やされている。また、世界中のスマートフォンには人工知能の要素をもつAIアシスタントが搭載され、音声聞きわけ質問に答え、インターネット上のサービスも探してくれる。さらに、ある日本人の男性が女性の歌声を合成したキャラクター「初音ミク」と結婚した、というニュースまで届く。こうした社会の急激な変化をとらえようとするとき、人類学のこれまでの調査方法や人間理解はどこまで有効なのだろう。この映画を観る価値は、まさにそこを問われるところにある。

ことばの迷い道

すごいよな

てらむら ひろふみ
寺村 裕史

民博 人類文明誌 研究部

突然の質問だが、読者のみなさんは下の写真（に写っているアルファベット）を見て（読んで）、何と書かれていると思われるだろうか。「SUGOIYONA（すごいよな）」と読めないだろうか？

この写真は、筆者が二〇一一年に中央アジアの国ウズベキスタンを初めて

訪れた際、サマルカンド市の市街地に入る直前に、車のなかから撮影したものである。街の入り口にあたる小高い丘の中腹に、突如あらわれた白い大きな文字に驚くとともに、「すごいよな」って何だ？とアルファベットを日本語読みしてしまい、慌ててカメラを取り出し写真を撮ったことを鮮明に覚えている。

ことばというものは不思議なもので、冷静に考えれば日本から遠く離れたウズベキスタンの地で日本語（として意味が通じることば）が書かれているはずはないのだが、そのときには「すごいよな」という日本語としてアルファベットが頭のなかにすっと入ってきた。初めて訪れる未知の国で右も左もわからず、現地のことばも全然知らないまま、最初は何のこっちゃ？と思っていたが、後から日本語のできる現地の人に聞



くと「それはソグディアナと読むのだ」と、にべもない返事が返ってきた。英語であれば「Sogdiana」になるはずだが、ウズベク語でアルファベット表記すると「Sugdiyona」となるらしい。「SUGOI」の「O」^オと筆者が思っていた文字は、じつは「D」であり、撮影時の角度の関係か、字が下手なのか、Dが丸いOに見えたというわけで、実際は「SUGDIYONA」と書かれていたようである。

ソグディアナは、中央アジアを代表する河川の阿姆ダリヤとシルダリヤに挟まれた地域を指し、その両河川のあいだを流れるザラフシャン川流域の古名である。およそ四〜七世紀ごろには商才と工芸技術に長けたソグド人がシルクロードを通じた東西・南北の交易に活躍し、サマルカンドはその中心都市として繁栄していた。丘に書かれた「SUGDIYONA」という白い大きな文字は、ここから先はソグディアナだ、というサマルカンド市の玄関口にあたる場所で看板のような役割を果たしていたものと思われる。

言い訳めいてしまうが、筆者も考古学者の端くれであり、世界史の知識としての「ソグディアナ」という「ことば」はもちろん知っていたが、生まれて初めてウズベキスタンを訪れた興奮と浮ついた気持ちは否定できないかもしれない。「SUGDIYONA」と「ソグディアナ」が頭のなかですぐには結びつかず、普通に日本語で読んで（理解して）しまった自分が、我ながら恥ずかしいとともに、まさに現地のことばに迷わされたエピソードである。

編集後記

偶然だが、本号では孫文さんとサクマ・シャルゲイさんという、民博にある総合研究大学院大学の院生2人が執筆してくれた。民博の大学院生は昨今、留学生が半数以上を占める。母語ではない日本語で書くのだから、ネイティブ・チェックは欠かせない。だが、そうした一手間を差し引いても、文化背景の違いから生じる視点や切り口のユニークさに魅了される。

特集では、先史以来、人類が手にしてきた編みと組みで作られるものと技法をとりあげた。基本の組織構造は6つに分類できるが、素材やその本数・形状、張力、美意識などの違いから、できあがるものには無限の広がりがあるという。例えば、論稿を集めて編み、ページに組んでいく編集は、文字どおりバスケットアリーに似ている。素材の個性を生かしつつ、書いて楽しい、読んで面白い月刊誌を目指したいと思う。今号から編集長を務めることになった。引き続き、よろしくお願ひしたい。(南真木人)

●表紙：タケなどを編んでつくったかご。軽くて丈夫なかごを自転車にとりつけることで、多くの荷物を容易に運ぶことができる
(撮影：上羽陽子、インド、アッサム州、2014年)

次号の予告

特集

「驚異と怪異」(仮)

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



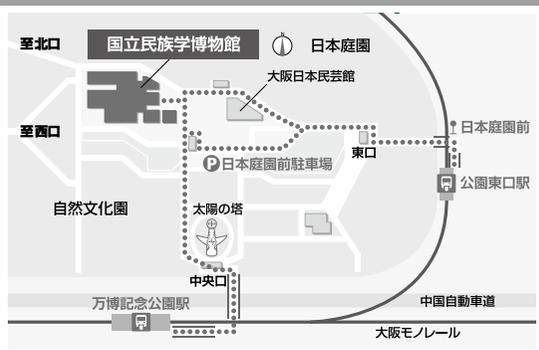
月刊みんぱく 2019年7月号

第43巻第7号通巻第502号 2019年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 南真木人(編集長) 上羽陽子 齋藤晃
菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾
デザイン 宮谷一欵 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 遊文舎

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通しください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKUofficial>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

